

視覚障害と発達障害を併せ持つ重複障害児における言語発達について

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
谷口 和嘉子

自閉症スペクトラム(広汎性発達障害)は、「社会的相互交渉」「コミュニケーション」「想像力」の障害を基本的障害とする「三つ組みの障害」として整理されている(Wing,1996)。これらの障害はいずれも言語発達に深く関わるものであるとされる。

広汎性発達障害を持つ子どもたちの多くは「指さし」、「みたて」の弱さなど、語彙数や構文の問題だけでは解決できない言語発達に関わるより根底的な問題も指摘されている。言語獲得の基盤として、Tomasello(2003)は、(1)他者とコミュニケーションをとりたいという欲求、(2)他者と同じ様にありたい(模倣したい)という欲求の2つを重視している。つまり、言語獲得のプロセスは他者への関心にはじまり、経験を子ども自身が生み出し、組織してゆく過程の中で発展させていくものであるといえる。

本研究では視覚障害と発達障害を併せ持つ重複障害児1名を対象とし、相手に伝えたいという気持ちや自発的に意志選択をする力を育むような助成的な介入のあり方を検討することを目的とする。方法としては、6月から11月までの期間に学校での授業時間である自立活動(コミュニケーション)時間における双六場面で観察された担当教師との1対1でのやりとりを分析の対象とし、「応答場面」と「発話場面」における対象児の未分化な応答・発話の形態に注目した。

分析の結果、「応答」や「発話」における言語発達の過程とその過程の中での援助者による介入のあり方について検討することができた。「応答場面」においては対象児に選択する機会を意図的に与えることで応答を促し、「しりとり」などの題材を使うことで相手とのやり取りを通じ言語発達を促すきっかけを見ることが出来た。また、「発話場面」においては、教師が対象児から自由な発話を引き出す機会を作り、やり取りを展開させることにより、相手とコミュニケーションをとりたいという思いから発せられた「見立て表現」や「つもり表現」が出現しやすくなったことがうかがえた。これは、対象児が他者への関心を持つという言語獲得のプロセスを進むきっかけの一つとして重要であると考えられる。また、対象児が相手の意図とは違うことを伝えたいという思いから発せられた「つもり表現」や「見立て表現」を支援者が敏感に受け止め、支援していくことが重要であると考えられる。